

今年最後の学習会



正信偈 同朋奉賛にて
お勤めをしています。

十一月十二日(土)十九時より今年度最後の学習会を開きました。

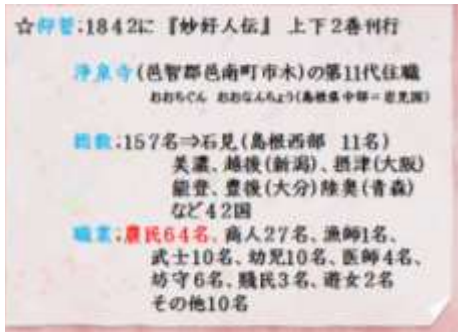
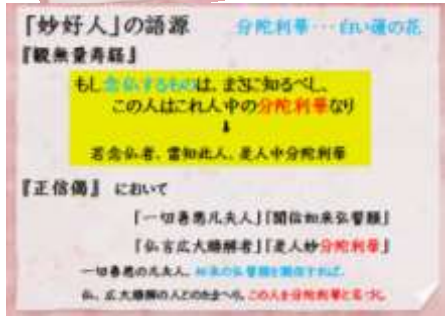
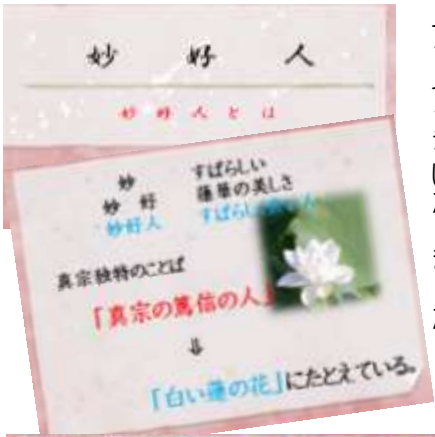
思い起こせばこの会もすでに十年経ってしまいましたが、この会もすでに十年経ってしまいましたが、その間には多くの皆様の積極的な思いにより支えられてきたことを、今しみじみと思ひ出し、感謝の思いを深くいたしております。

この会の発足当初からご出席いただいている皆様も四名ほどおられ、現在は十名ほどの方が参加してくださっています。

改めて妙好人

初めてのプレゼンテーション

妙好人の生き方に、私たちは教えられるところが多いのではないが、そんなことを思い、この数年間学んでまいりました。まだまだこれからですが、今回の勉強会で初めてのプレゼンをいたしました。



無学文盲と言われた人たちが多かつたようですが、全国には多くの方が居られたように思います。

才市の信仰内容のまとめ

妙好人の表白は自らの心の中に動くものが主となる。学問のある人々の場合では、その学問の故に、自らを偽ることを知っている。学問のおかげで他人の事でも我がことのように言いなす術を覚えているのである。彼らの論議なるものは、それゆえに抽象的になる。抽象的であるからあてはまる点が多いが、徹底を欠くのが常である。したがってそれを聴く者の胸に突き通るといことはない。妙好人の表白に至っては、それと大いにその趣を異にする。彼らの口に出し筆に写すところに、各自の胸襟そのものから流出するのであるから、人に迫るものが感じられる。錐(きり)でえぐるようなものがある。又真綿で包まれるようなものがある。また水の澄んだようなものがある。

浅原才市さんの像と写真。像の頭には角が生えています。その思いがこの詩に



(邪見)(驕慢)
○あさまし、あさまし、じゃけん、京まん、あくさいち。
じゃけん、京まん、あくさいち。
あさまし、あさまし、あくさいち。
ひとのものわ、なんぼでも、ほしい。
(一)
どうても、どうても、ほしい、ほしい。
(角)
ほしいのつのはほ、
あさまし、あさまし、あさまし、あさまし、
じゃけんものどわ、このさいちがことよ、
(恐れて)
このさいちわ、ひとがをそれてをります、
(思うて)
それに、ひとがしらんと、をもうてをります。

学問がなくても、思索がなくてもいい。人生そのものについて真剣な反省を行った人々だけにみ開けるのが霊性的自覚の世界である。
宗教的意識が高まるということは、人生に対する不安の念が強まると言う義である。真宗では『罪悪深重、地獄必定』と言う形式で晩年の人々に迫ってくる。
あさまし、じゃけん、はずかし等、『罪悪深重』の身の自覚

浅原才市の研究者。鈴木大拙先生の『妙好人』を主に参考にさせていただきました。
先生の鋭い妙好人の捉え方には頷かされることばかりでした。
法を説く人は数知れずいるが、法に生きる人はいない。
そう思えてくる妙好人の学びでした。

浅原才市さんの詩。正直な思い(罪悪深重のわが身)が、心に響きます。